

茶の湯文化学会会報

No.96

第96号 / 2018年3月28日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314
http://www.chanoyu-gakkai.jp e-mail chanoyu@oregano.ocn.ne.jp

吉村観阿と「一閑桃之絵細棗」
宮武慶之

吉村観阿とは

「かんあ」という響きに徳の香りを感じるのは私だけであろうか。

この号を名乗った人物に吉村観阿（白醉庵／一七六五―一八四八）がいる。観阿とは江戸の町人数寄者である。観阿は若い頃、松平不昧（一七五一―一八一八）と親しくしていたが、不昧没後は溝口翠濤（一七九九―一八五八）と親しくし同家へ出入りする。特に観阿で注目されるのが道具の取り次ぎであり、その目利きが生業になっていたことが知れる。現在でも観阿の箱書きは光悦会や大師会などでも時折見かけられ、一部では高い評価が与えられている。

特に平成二十九年は松平不昧二百年遠忌、小堀宗中百五十年遠忌を迎え、翌平成三十年は不昧関連の行事も多く、観阿に注目することも何かの縁と考える。

そもそも観阿で著名な出来事は自身の八十賀に際し原羊遊斎（一七六九―一八四五）に依頼して「一閑桃之絵細棗」（図1）を百二十五個作成し知友に配ったことである。しかしながら、細棗はどのような場面で配られたのかなどは明らかになっていなかった。調査

を行なったところ、八十賀の茶会記を確認した。そこで本稿では観阿の八十賀と「一閑桃之絵細棗」の関係について述べたい。



図1 原羊遊斎作「一閑桃之絵細棗」（個人蔵）

八十賀の茶会

観阿による八十賀の茶会が天保十五年（一八四四）正月七日から開始された。このとき翠濤が参会しており、連続して開催された茶会の初日であったと目される。茶席は浅草白醉庵内の茶室「楽之斎」という三畳の小間である。観阿の八十賀茶会記は現在、個人が所蔵しており、その道具組は次の通りである。

初座

掛物 桑山可齋筆

君か代は千代にや千代に 又千代
に千代を重ねて千代をよろこぶ

釜 芦屋

香合 ハンネラ

炭取 相禅(宗全か)組きり

灰キ 長次郎 焼貫

三羽 黒鶴 遠州所持々書付

後座

花入 信楽蹲

花 梅

水指 空中 銘宝傘 共箱

茶入 柳棗 袋大門つり

茶碗 鉢子手 堅手

銘老の友 小堀権十郎書付

茶杓 藤村庸軒

翻 曲

薄茶

茶碗 一入 共箱

二 斗々屋 銘老松 不昧公御書付

広座敷(披の間)

掛物 狩野山楽画 寿老 賛三宅亡羊

棚 存星柚香合 遠州侯書付

先ず初座の床の間の掛物には桑山可齋
(一六一五—一七〇〇)による詠草で「君か
代は千代にや千代に又千代に千代を重ねて千
代をよろこぶ」という千代の歌が掛けられた。

釜は芦屋、香合には素焼きの南蛮ハンネラで
ある。小堀遠州(一五七九—一六四七)や不
昧の書付のある作品がいくつか確認できる。

菓子には白餡入白求肥である。白餡を白求
肥で包んだもので、末富の山口富藏氏に再現
してもらった。上質な白いヤマノイモを金団
にして、それを丸めて求肥で包むという、内
外共に真っ白な菓子である(図2)。なんと
も言えず上品な味わいであった。茶会が一月
ということと賀の茶会ということもあつて雪

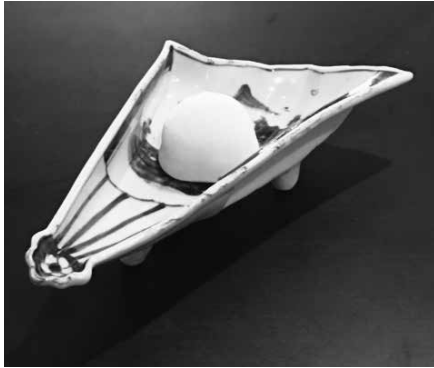


図2 白餡入求肥餅の再現。古染付扇面皿に盛っ
たところ(協力、末富)

の瑞気を感じさせる菓子であったことが想像
される。

披の間

茶会後は開きの間を設けて広間の座敷に
移った。床の間には狩野山楽(一五五九—
一六三五)が寿老人を描き、三宅亡羊
(一五八〇—一六四九)の賛がある掛物が掛
けられる。棚には存星柚香合で遠州の書付が
あるとされる。ちなみに『遠州蔵帳』所載の
存星柚香合は現在、個人が所蔵しているが、
実際に拝見したところ箱墨書や付属品から観
阿に關係しそうな箇所は見当たらなかった。
遠州による箱墨書のある香合が他にもあつた
のかもしれない。

掛物の山楽による寿老人と亡羊の賛のある
掛物について触れておきたい。昭和十六年
(一九四二)五月二十二日に大阪美術倶楽部
で開催された展覧入札がある。その目録であ
る『展覧入札』には

- 二一 山楽 福祿寿 亡羊賛 着色 大倉
- 極 白醉庵箱

との記載がある。そこで調査を行なったとこ

ろ、この作品は現在、個人が所蔵していた（図3）。箱墨書および軸の巻留めに観阿の墨書があり、観阿八十賀で使用された作品と同等とされる。



図3 狩野山楽画三亡羊賛
〔福祿寿（個人蔵）〕

さて亡羊の賛には

徳香応梅 齡松亀鶴 老人依童子在側

（徳香は梅に応じ、齡松と亀鶴と。老人は意に依り、童子は側に在り。）

とある。絵の構図を亡羊が賛したものである。福祿寿の思いつきり伸びた眉毛を右手に持つ構図が描かれている珍しい絵である。

ところで溝口家の記録によれば茶会の前年である天保十四年十二月二十日、観阿は翠濤と小堀宗中（正優／一七八六一一八六七）、

狩野晴川院（養信／一七九六一一八四六）の三人に合作を所望している。所望した絵の内容は翠濤に福祿寿、宗中に歌、晴川院に鶴亀である。所望を受けた翠濤は松花堂を意図した福祿寿を描き、宗中は『拾遺抄（巻第五）』の齋宮内侍による一首

色替ぬまつと竹とのすえのよをいつれ久しと君のみそ見む

と書き、晴川院は鶴亀を描いた。この合作は大正九年（一九二〇）四月二十二日に東京美術倶楽部で開催された朝吹家と野崎家の入札に際して作成された売立目録『朝吹氏野崎氏蔵品入札』に図版が所載される（図4）。この合作を観阿が所望したのは翌年に八十歳の祝いの茶会を催すためのものであった。このように溝口家での観阿は、そこに集う宗中や晴川院などとの交流があり、当然、観阿八十賀茶会にも参会していたものと考えられる。茶会当日、披の間で翠濤、宗中、晴川院の三人に、山楽の原画をみせる趣向であったことがわかる。

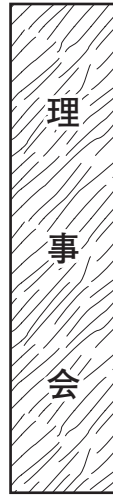


図4 翠濤、宗中、晴川院合作「福祿寿」
〔朝吹氏野崎氏蔵品入札より〕

細棗を配る

観阿の八十賀茶会では掛物に千代に因んだ掛物を掛け、棗の箱にも観阿により「幾千代も猶いく千世も八十八たゝ東方朔の数取の歳」という千代に因んだ和歌一首が書かれている。千代とは千年の意味があり、また千年の長寿を祝う意味として東方朔の言葉がある。つまり桃の絵は、千代をキーワードに、千年の弥栄を言祝ぐ意匠として使用されたものであることがわかる。観阿と妻観勢は黄檗宗の葛飾牛島弘福寺二十三世鶴峰廣大（一八三八年没）を仏法の師としていた。黄檗宗の寺院では、萬福寺の開山堂にもみられるように、堂の戸に桃の意匠を用いた桃戸を用いる。『黄檗冠字考』（一九三九年）によれば桃を意匠として用いる意味は邪気を払い、延齢の功と延喜によるものである。この点も合わさって観阿は細棗に採用する意匠として桃を着想したのかもしれない。

溝口家の記録によれば「一閑桃之絵細棗」は茶会の記念品として配られたとある。配られた場所を考えると、披の間で、山楽の寿老人を前にして祝意溢れる席で記念の細棗を配ったものと結論することができる。



平成二十九年第二回理事會が、平成三十年二月二十五日（日）午後二時より同志社大 学徳照館會議室において行われた。理事十六名と幹事五名が出席し、会長の挨拶の後、中村（修）副会長の司會進行で以下の議題について討議が行われた。

- 一、平成三十年度總會提出議案について
 - ・平成二十九年事業報告、決算報告
 - ・平成三十年度事業案、予算案
 - 二、無形文化遺産化について
 - 三、会誌・会報について
 - 四、平成三十年度大会について
 - 五、第五回「お茶三昧」二〇一八年
 - 六、その他
- 第一号議案では、平成三十年度總會提出

議案について中村（修）副会長から、平成二十九年事業報告と決算報告（案）を読み上げて報告された。平成三十年度事業案について、各例会担当者より説明があった。

研究会について、中村（修）副会長より、第四十一回研究会タイ北部チェンライ七月二十一日（土）～二十五日（水）の日程で行われることが報告された。タイ北部のチェンライを探訪、食べるお茶ミアンの産地の見学、山岳少数民族（カレン族・アカ族）の村訪問、ゴールデントライアングルのクルーズなどを行う予定。

平成三十年度予算案について、中村（修）副会長から説明があり、会誌発行の予算が、年発行回数に見合うだけの予算になっていたため、実正額の予算額に変更した。

また、決算に関わって、会員数の推移を把握する必要性が指摘された。

第二号議案では、無形文化遺産化について、熊倉会長が文化庁文化財部伝統文化課を訪問し、「茶の湯」の重要無形文化財指定について上申・懇談をおこなった。伝統文化財課の高橋宏治課長ほか2名（課長補佐、係長）が対応。熊倉会長からその内容が報告された。

「茶の湯」の概念がどのようなものか定義

する必要性が認識された。茶道やその文化のみではなく、茶の湯に関わる広範囲な概念を構築することが、指定の上で重要であり、文化の直接的な担い手のみならず、それを支える建築・工芸など技術者を含みこんだものとするのが肝要であろう。そのような捉え方をすることで、茶の湯が衰退すると、それを支える諸文化も衰退することを訴えることが可能であり、指定の必然性がアピールできるといえる。

具体的に「茶の湯」概念を構築するためには、茶の湯文化学会が中心となり、茶の湯に関わるさまざまな伝統文化によって構成された「茶の湯文化協会」などの組織を構成することも大切である。

また、指定申請には、個人指定・総合指定など、そのあり方にふさわしいものを検討する必要もあるうし、文化庁への働きかけも、文化振興・助成などを所管する文化庁芸術文化課、文化財保護などを所管する文化財部伝統文化課・美術学芸課など、目指す内容によって、窓口も大きく異なるものと思われる。

以上、懇談の内容は多岐にわたったが、種々の指摘とアドバイスは有益なものと思われ、今後、具体化する方途について、文化庁とも

協議を深めていくことが了解された。

第三号議案では、会誌について、山田編集委員長より二十九号の発行に向けて進めている。三十号は投稿論文が少なく、理事や幹事にも依頼原稿として、ぜひ書いていただきたいと依頼があった。

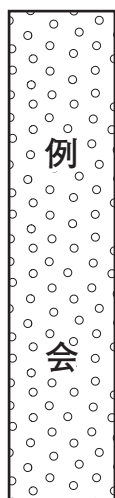
第四号議案では、平成三十年大会については、六月十六日(土)・十七日(日)に、松江市くまびきメッセにおいて開催することが決まった。これをうけて、中村利則副会長より実施計画案が出され、承認された。

平成三十年は、松平不昧公の二〇〇年忌にあたり、シンポジウムのテーマを「松平不昧と茶の湯」とし、熊倉功夫会長・藤間寛(松江歴史館学芸専門監・元島根県立美術館副館長)・中村利則副会長に発表していただく事となった。

見学会については、中村利則副会長が交渉し、有沢山荘菅田庵(工事中)を見学する。

第五議案では、第五回「お茶三昧」二〇一八年について矢野副会長より、第五回「お茶三昧」二〇一八年茶の湯と茶文化に関するサンフランシスコ国際会議についての後援と広報の依頼があったことの報告があった。

第六議案では、熊倉会長より、「ふじのくに茶の都ミュージアム」が新しく開館することとなり、連携を取っていききたいとの告知があった。



近畿例会

(平成二十九年十二月九日)

『コミュニケーション学』を通して見た茶道における『第二の見立て』:

伊住政和氏の言葉『無言のコミュニケーション・シオン』を出発点として

高橋 尚美

本発表は、「コミュニケーション学」の視点から茶道を分析した研究の一端である。大学で茶道と英語を融合した授業を十八年間担当する中で、「稽古」とは違う「講義」での、体系的で理論的な茶道の教授法を見出せないものかと模索してきた。もしそれが見つかれば、年代や国籍を超えて茶道の理解が深まるはずだと考えた。そうして、この学問に出会ったのである。

コミュニケーションは「シンボル」を紹介して行われ、そこには「記号化」と「記号解釈」という過程がある。そして「言語コミュニケーション」と「非言語コミュニケーション」は、「コミュニケーションの四つのモード」として整理できる。裏千家当家家元の子である伊住政和氏(一九五八―二〇〇三)は生前、「茶道は無言のコミュニケーションである」と言っておられた。この、茶道の大きな特徴が表現された「無言のコミュニケーション」は、「コミュニケーションの四つのモード」を基にして理論的にも説明ができる。

そこで、「記号化」と「記号解釈」の好例として、茶道の「見立て」を考察した。これを二つの意味に大別し、「第一の見立て」と「第二の見立て」と呼ぶことにした。前者は、元々茶道具ではない物を茶道具に見立てて使うことである。後者は、茶会や茶事の「趣向」に盛り込む場合の見立てである。それは今眼前にある事柄から別世界を創出する「しかけ」であり、一つの道具だけでなく複数の道具や言動を連携させて「記号化」し、亭主から客に「メッセージ」を送るのである。この「第二の見立て」の構造を、

ある茶事の事例を表に示して明らかにした。

「大徳寺寸松庵伝来の三幅対と吉村観阿」

宮武 慶之

趙昌筆釈迦像、狩野探幽（一六〇二—一六七四）による江月宗玩（一五七四—一六四三）、佐久間将監（寸松庵／一五七〇—一六四二）の寿像を加えた三幅対は寸松庵に伝来した。いつの時点かは不明だが同庵から流出し、江戸時代後期に吉村観阿（白酔庵／一七六五—一八四八）が所持し、その後は新発田藩十代藩主溝口直諒（翠濤／一七九九—一八五八）が入手する。

ところで霞兄老人（一八〇〇生、没年不詳）による『過眼録』は近世の茶の湯文化を研究する上で重要な資料である。『過眼録』からわかることは、霞兄老人が酒井抱一（一七六一—一八二八）、西村麴庵（一七八四—一八五三）、観阿をはじめ、古筆了伴（一七九〇—一八五三）、本屋了我（一七五三生。没年不詳）、墨屋良斎（生没年不詳）らと交流のあったことである。このことは観阿のネットワークからみると、親しい人物の中に霞兄老人もいたこととなる。

『過眼録』には寸松庵伝来の三幅対の模写

と塗箱のプロッタージュが所載されている。これまで賛文の全文と塗箱の詳細な形状は明らかにされておらず、同書の記述は、当時の実見した記録として重要である。

三幅対の模写から江月像と将監像の賛文、および顔容や釈迦像の衣紋がわかり、塗箱については地黒で面取りした部分を朱に塗り、甲に彫られた文字の部分は青漆で塗られていることが判明する。

三幅対を観阿が所持した点に注目すると、収納する塗箱は観阿と関係の深い作品とも意匠が共通していた。観阿が天保十三年（一八四二）に法隆寺に寄進した弘法大師額箱（法隆寺蔵）は面朱であり、観阿の所持した高麗茶碗銘「雨漏」（福岡市美術館蔵）の外箱には金具が付けられ、これらは寸松庵伝来の三幅対を収納する塗箱の意匠を活用したものと考えられる。観阿にとって三幅対は内容もさることながら、塗箱も重要な意味をもつ作品であったことがわかった。

東海例会（浜松会場）

（平成三十年一月二十七日）

「永井直勝・尚政と小堀遠州」

深谷 信子

近世初期、永井直勝と嫡男・尚政の事蹟と、小堀遠州との政治的・文化的関わりについて報告したい。

永井尚政の父・直勝（永禄六／寛永二）は、三河武士で、徳川家に三十貫で仕え、長久手合戦で軍功を挙げ、関ヶ原戦後、細川幽斉から「室町家式」を学び、徳川家の政權確立上必須の將軍宣下・將軍廟の建造等の儀礼・武家故実に関する第一人者として、徳川秀忠の評定衆になる。

嫡男・尚政（天正十五／寛文八）は、父を継いで秀忠の側近から、年寄（老中）になり、大御所秀忠の施策である畿内西国の押さえ、寺社・朝廷・豪商達の政治・文化・経済的統制を強力に執行して行く。同時に、秀忠と古田織部の茶湯上の連絡役を務め、茶湯に深く、両御所と諸大名との強い文化的人脈を持っていた。秀忠の死去以降、家光の親政により、寛永十年、山城国淀城に転封にされ、同十一年から、畿内以西の民政を統轄する、いわゆる上方八人衆組織のトップとして働く。

遠州（天正七／正保四）は、幕府の畿内重職である備中国奉行・上方郡代・伏見奉行を歴任し、畿内近国一帯の紛争裁許、公

儀作事や將軍上洛に関する一切を取り仕切っていた。又、武家茶道の第一人者でもあった。尚政と同じく上方八人衆の一人に拔擢され、頻繁に参府することになる。寛永十九年、幕府の存在をも揺るがす寛永飢饉にあたり、その対策・農村法令作成の中心的存在になり、農村法令の全国的な執行のため「江戸四年詰」を命じられる。徳川政権に相応しい茶を創造し、四年詰めのために、江戸に参勤する諸大名等四百余人に、約百回の茶会を催して自らの茶を全国に広める。こうした実績は、小大名・小堀遠州のみの力でなく、尚政達幕閣の支援があったからこそなし得たことである。「小堀遠州の茶」は、江戸期は勿論、現在も高く評価されている。



東京例会

五月二十六日(土) 午後二時

(会場: 根津美術館)

「八百善の懐石について」

依田 徹

「続き薄茶手続きの流派間比較」

岡本 浩一

七月二十八日(土) 午後二時

(会場: 五島美術館)

「長尾欽弥について(仮)」

岡 宏憲

「未定」

佐藤 留美

九月二十九日(土) 午後二時

(会場: 五島美術館)

「売立目録にみる薩摩茶人」

松村真希子

「大名屋敷の宴会と茶の湯」

追川 吉生

東海例会

四月二十一日(土) 午後二時

(会場: 名古屋文化短期大学)

「白酔庵・吉村観阿」

宮武 慶之

六月二十三日(土) 午後二時

(会場: 名古屋文化短期大学)

「龍光院の天井について」

加藤 祥平

九月二十二日(土) 午後二時

(会場: 名古屋文化短期大学)

「尾張徳川家と遠州」

深谷 信子

金沢例会

七月一日(日) 午後一時半

(会場: 未定)

「茶の湯釜」

竹内 順一

九月三十日(日) 午後一時半

(会場: 金沢市湯涌荒屋町 金沢江戸村)

江戸村茶会

高知例会

六月二十四日(日) 午前十時～正午

(会場: 高知県立文学館 慶雲庵茶室)

「茶の湯文化学会三十年度大会の

研究発表をテーマとしたシンポジウム」

軽食茶事 正午～午後四時

席 主 三名

会 費 千円

九月二日(日) 午前十時～正午

(会場: 高知県立文学館 慶雲庵茶室)

文献研究 「未定」

平成三十年度
総会・大会のご案内

平成三十年度総会・大会を左記の日程で行ないます。

日程

平成三十年六月十六日(土)

見学会 (有沢山荘菅田庵(修理工事中
現場の見学))

懇親会 (会場:由志園)

六月十七日(日)

総会・大会

開催地:島根県松江市くにびきメッセ

お知らせ

新刊案内

*『立花宗茂』岡宏憲著 宮帯出版社(定価二、五〇〇円+税)

將軍相伴衆としての後半生。秀忠・家光の寵臣として活躍した、かつての猛将のよう

ひとつの顔。

*『ビジュアル版 戦国武将茶人』桑田忠親・矢部良明・伊藤潤・宮下玄霸著 宮帯出版社(定価一、八〇〇円+税)

茶人にあらねば武将にあらず。茶の道でも活躍した戦国武将一九一人を総覧したもので、論考やコラムも収録。

*『茶の湯空間の近代』桐浴邦夫著 思文閣出版社(定価五、八〇〇円+税)

茶の湯の系譜を考慮しつつ、「茶の湯空間」が近代においてどのように理解されたのかを読み解く書。

※年会費未納の方は、至急お払込み下さいませすよう、よろしくお願いいたします。

